

消化器内視鏡の感染管理における ATP ふき取り検査の活用事例 ～「見えない汚れ」を客観的に数値化、意識改革に絶大な効果～



医療編

大阪医科大学附属病院 消化器内視鏡センター

米国で十二指腸内視鏡による医療機器事故が多数（2013～14年で75例）報告されるなど、公衆衛生分野において内視鏡の洗浄・消毒は極めて重要な課題である。大阪医科大学附属病院では、内視鏡の自動洗浄・消毒装置を導入したり、すべての内視鏡検査に対して高水準消毒を行うなど、内視鏡の衛生管理を徹底している。

同院の阿部真也主任は、内視鏡の洗浄後の清浄度確認に ATP ふき取り検査を導入した経緯について「内視鏡はどのような検査で使用したかによって、汚れの種類や度合いが異なる。汚れ方が違えば、同じ手順で洗浄しても、清浄度は違ってくる。そこで自動洗浄・消毒装置を使う前に『清浄度を客観的に評価するツール』として ATP 検査を行うことにした」と説明する。また、同氏は ATP 検査の導入効果として「最も大きいのはスタッフの意識の変化。『目視できないレベルの汚れであっても、大きな感染リスクになり得る』という意識を強く持つようになった」と強調する。